

ヨハネ11：55-12：50

11:55 さて、ユダヤ人の過越の祭りが間近であった。多くの人々が、身を清めるために、過越の祭りの前にいなかからエルサレムに上って来た。 11:56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って、互いに言った。「あなたがたはどう思いますか。あの方は祭りに来られることはないでしょうか。」 11:57 さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は届け出なければならぬという命令を出していた。 12:1 イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。 12:2 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。 12:3 マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。 12:4 ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。 12:5 「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」 12:6 しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。 12:7 イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。 12:8 あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです。」 12:9 大ぜいのユダヤ人の群れが、イエスがそこにおられることを聞いて、やって来た。それはただイエスのためだけではなく、イエスによって死人の中からよみがえったラザロを見るためでもあった。 12:10 祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。 12:11 それは、彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。 12:12 その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、 12:13 しゅろの木の枝を取って、出迎えるために出て行った。そして大声で叫んだ。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」 12:14 イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりにであった。 12:15 「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」 12:16 初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。 12:17 イエスがラザロを墓から呼び出し、死人の中からよみがえらせたときにイエスといっしょにいた大ぜいの人々は、そのことのあかしをした。 12:18 そのため群衆もイエスを出迎えた。イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからである。 12:19 そこで、パリサイ人たちは互いに言った。「どうしたのだ。何一つうまくいっていない。見なさい。世はあげてあの人のあとについて行ってしまった。」 12:20 さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。 12:21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。 12:22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。 12:23 すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。 12:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。 12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。 12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。 12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。 12:28 父よ。御名の栄光を現してください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。」 12:29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話したのだ」と言った。 12:30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。 12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。 12:32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」 12:33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。 12:34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは、律法で、キリストはいつまでも生きておられると聞きましたが、どうしてあなたは、人の子は上げられなければ

ならない、と言われるのですか。その人の子とはだれですか。」 12:35 イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。12:36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。12:37 イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。12:38 それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。12:39 彼らが信じることができなかつたのは、イザヤがまた次のように言ったからである。12:40 「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」12:41 イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。12:42 しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちをはばかって、告白はしなかつた。会堂から追放されないためであった。12:43 彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである。12:44 また、イエスは大声で言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わした方を信じるのです。12:45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです。12:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。12:47 だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。12:48 わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。12:49 わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。12:50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」

導入

11-20章は、ヨハネの福音書の中盤ですが、「復活」の奇跡に始まり、「復活」の奇跡に終わります。

まずラザロが死からよみがえらされた奇跡があり、最後にはイエスの復活があります。このふたつの出来事の際に、イエスはご自身を待ち受ける死について弟子たちに話されます。そこには、十字架に関する重大な教えが含まれています。

12章全体は、イエスの死が成就することを最優先事項に位置付けます。

11章でラザロは死からよみがえりました。しかし、12章で予告された死を通らなければこのいのちにいたることはないと言います。

ヨハネは、エルサレム入城の説明のために旧約聖書を二度引用しているので、12章に関連する旧約聖書の背景を知っておくのがよいでしょう。

13節で、ヨハネは詩篇118篇を引用します。この詩篇は、出エジプトを振り返って綴られた詩篇のひとつです。出エジプトの際、神はご自身の選びの民であるイスラエル人をエジプトの奴隷生活から救い出されました。

イスラエル人解放のきっかけとなった最後の災いでは、死の使いがエジプト中の長男と家畜の初子を殺しました。

イスラエルの民は、傷のない子羊を殺してその血を家の門柱とかもいに塗り、災いから守られました。(出エジプト12：1-13)

これらの詩篇は、過越しの祭りで歌われる詩篇です。118篇は、祭りのためにエルサレムに上って来た旅人たちを歓迎する歌でした。

群衆たちは、過越しの意味を含むこの詩篇を用いて、メシヤと思われる人、つまり神の選びの民を救いに来られた人を歓迎しました。

次にヨハネが引用したのは、預言者ゼカリヤの言葉です。

ゼカリヤ9：9-13を読んでみましょう。

9:9 シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子のろばに。9:10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。9:11 あなたについても、あなたとの契約の血によって、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き放つ。9:12 望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。9:13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。

王の来臨についてゼカリヤの預言が指摘する3つのポイント

1. 王の来臨は、戦いの終結をもたらす。(10節)
2. 王は諸国に平和を宣言し、地の果てまで王の支配が及ぶ。(11節)
3. 王の来臨のとき、神の契約の血によって囚人が解放される。(11節)

多くの説教者は、イエスが子ろばに乗ってエルサレムに入られる預言を強調します。しかし、それがゼカリヤが預言で語ったことのほんの一部であることは見過ごされがちです。このことを、弟子たちも後になるまで気づきませんでした。

今日の聖書箇所を大きく4つに分けて学んでいきましょう。

1. イエスの死のための備え (11：55-12：11)

ユダヤの過越しの祭りが近づいていました。この祭りの6日前にイエスはベタニヤに戻られました。ベタニヤはエルサレムから数キロメートルの町で、ラザロが死から復活した場所です。ラザロの噂を聞いてイエスをメシヤと信じる人がこのときもまだいました。

イエスは、マリヤ、マルタ、ラザロ、そして弟子たちとともに食事をしておられました。食事の席で、ある出来事が起こりました。マリヤが高価な香油をイエスの足に注いだのです。それは、マリヤの深い愛を示す犠牲的な行為でした。その油の代金は約300デナリだとあります。それは当時の人々の年収にあたる金額です。

現代の価値に換算すると、日本円で約300万円、16,000英ポンド、25,000アメリカドルほどでしょう。

誰かが一年分の給料をはたいて香水を買い、誰かの足に注いだら、誰でもびっくりするでしょう。ぜいたくだ、浪費だと皆が言うでしょう。

マリヤの行動も、イエスの弟子のひとりであるユダが批判しました。

しかしイエスは、マリヤの行いを非難なさらず、むしろ褒められました。そして、マリヤの行動は、イエスの埋葬の準備だとおっしゃいました。

マリヤは自らの行いの重要性を理解していませんでした。彼女はただ、イエスに対するあふれる愛を行動に示しただけです。

スコットランドの有名な説教者ウィリアム・パークレーは、この箇所について次のように語りました。

「マリヤがイエスの足に高価な香油を注ぐと、ユダはその行いに対し無駄使いではないかと無情に疑問を唱えました。イエスは、貧しい人に施しをする機会はいつでもあるが、イエスに対する親切は今しかできない、その機会は永遠に失われる、と言ってユダを黙らせました。」

イエスに仕える機会はいつまでもあるわけではないことを、私たちは厳粛に受け止めるべきです。伴う犠牲を考えて行動しないこともあるでしょう。親切な行いをするようにと聖霊に促されて起こした行動が、無駄になることは決してありません。神は、何らかの方法で必ず私たちに報いてくださいます。

マタイ10：40-42

10:40 あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。 10:41 預言者を預言者だということで受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。 10:42 わたしの弟子だということで、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。」

人の行為を批判するチャンスではなく、神の民を祝福するチャンスを求めましょう。

2. 死に向かうイエスの到着 (12-19節)

この箇所は、「棕櫚(しゅろ)の主日」と呼ばれるイースター直前の日曜日の説教によく登場します。このときのユダヤ人は祝賀ムードいっぱいでした。というのも、子ろばに乗ってエルサレムに入られるイエスがユダヤ人をローマ帝国の支配から解放し、国を治めてくれると人々は考えたからです。

イエスは群衆から称賛されましたが、イエスにとっては祝いの時ではありませんでした。一週間後には死が待っています。それも、通常の死に方ではありません。文明社会において認められたもっとも惨い死に方です。

十字架にかかってゆっくりと死んでいくのです。それに加え、イエスは何よりも残酷な罰を受けようとしていました。それは、神から引き離されること、そして私たちの罪のために神の御怒りが注がれることです。

この箇所の主旨を人々が見逃したことがこの箇所の重要ポイントです。

16節には、「初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。」とあります。

人々は、イエスがどのようなメシヤになられるのかという点を見極められませんでした。神のみことばを引用しても、神が何をおっしゃっているか理解していなかったのです。なぜなら、聖書は「霊の書物」であり、聖書全体の文脈や当時の著者の置かれた背景などを踏まえて霊的に判断しなければならないからです。これらの預言が霊的な内容であることを私たちが理解することをヨハネは目指していました。

弟子たちが後になって気づいた意味を理解するには、私たちが今朝はじめにしたようにゼカリヤ書に戻って、その預言の内容に留意する必要があります。

3. イエスの死についての説明と御父の承認 (20-36節)

まず23節で、神が定められたイエスの死の時が来たことがわかります。

ヨハネ2：4でガリラヤのカナの婚礼の際、イエスが「わたしの時はまだ来ていません。」とおっしゃったのは対照的です。

神は、歴史上の重要な出来事すべてをご自身のタイミングで行われます。私たちの人生における出来事についても同じです。それは必ずしも、私たちの計画通りではありません。

詩篇 37:23 人の歩みは【主】によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。

イエスは、ご自身のときがどのようなものかをとって語られます。その後、イエスに従うことにもなう犠牲についても説明なさいました。イエスの犠牲の恩恵に与るには、イエスに従う必要があります。

24節で、イエスは目前に迫ったご自身の死を自然に例えて話されました。

一粒の麦が落ちて死ぬことで、発芽して多くの収穫を得ます。

種が死ぬことなく収穫はありません。それは自然の法則です。

イエスが地上を歩まれた当時、大半の人々が農耕文化に暮らしていました。収穫を得るために種をまくことはよくわかっていましたし、そのために種が死ななければならぬことも理解していました。

永遠のいのちをすべての人に提供するには、イエスが十字架上で死ななければならぬことを、私たちは聖書によって知っています。イエスの死は絶対に必要でした。他の方法はなかったのです。

イエスに従ってイエスの死の恩恵を受けるには、この世で自らのいのちを失わなければならぬともイエスはおっしゃいました。これは「偉大な交換」です。私たちは、イエスが私たちに与えてくださるいのちを得るために、自分のいのちを捨てます。

コリント第二5：21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。

私たちは、肉で生きる命や罪をすべて捨てます。それは、いのちを受けるためです。そのいのちにより、私たちの心は満たされ、ついには新しいからだをいただいて永遠にイエスとともに生きることができます。

救い主としてイエスを信じるなら、そのいのちが始まります。そのいのちに終わりはありません。永遠だからです。

多くの方は、この世の人生に磁石のようにくっついて離れようとしません。この世の人生がその人をだめにします。まるで動物園のライオンのように囚われの身です。自分で自由になることはできません。その人たちにとって人生とは、死に向かって降りる下り坂です。

イエスを自らの救い主として信じるなら、「イエスを十字架につけたのは私の罪だ」ということを本当に理解するなら、心から悔い改めてイエスに赦しを求めるなら、そして、この世の人生を失ってでもイエスについていこうと決心するなら、あなたをつないでいた鎖は解け、心は解き放たれ、存分にイエスについていくことができるでしょう。

多くの賛美歌を記したチャールズ・ウェスレーは、有名な賛美で次のように歌いました。

讚美歌第二230番「我が主を十字架の」

我が主を十字架の 悩みと死にまで
追いやりまつりし 我をも顧(かえり)み
救いの恵みに あずからしめ給う
御神(みかみ)の愛こそ まことの愛なれ

悪魔のひとやに 閉じ込められたる
我にも御光(みひかり) 注がせ給えば
縄目(なわめ)は解け去り 自由の身となりぬ
立ちてぞ主イエスの 御蹟(みあと)に従わん

27-30節には、「御父」の証があります。

イエスの心が騒いでいたとありますが、当然です。この世の罪の重荷をすべて背負っておられたのですから。

イエスは、ご自身の身に起ころうとしているおぞましい出来事から救われたいと願われました。

しかし、そうはならないことをご存知でした。この目的のために天を離れてこの世に来られたからです。

イエスにとって、地上での人生最後の数週間、神のみこころに従うのはとてもたいへんでした。けれども、イエスが父に従わなければ、私たちに永遠の命という希望はありません。

神は天からイエスに語りかけ、励ましておられるようです。その声は、周囲の人々には「雷」のように聞こえました。しかしイエスは30節で、神の声が聞こえたのはイエスのためではなく、人々のためだとおっしゃいました。

天から聞こえた神の御声は、弟子たちを励ますためだったのでしょう。彼らは、自分たちも理解に苦しむ出来事について証することになるのです。少なくとも、天から神の声が聞こえたことで、これらの出来事を神が承認しておられることがわかります。弟子たちは後からこのことを振り返り、一連の出来事に納得することができるでしょう。

生きていく中で起こる出来事に働いておられる神の御手が常に見えるわけではありません。後から振り返って初めて、私たちのために神が道を閉ざしてくださったとか、神の栄光のために道を開いてくださったとかいうことがわかるのです。

「私たちのために死んでくださったお方を信頼することができる」とよく言われますが、まったくそのとおりです。私たちは、どんな状況でも神を信頼することができます。私たちの人生にみこころをもって治めてくださる神にお任せすることができます。

31-33節には、十字架が成し遂げることについて記されています。

この箇所は、イエスの死があらゆることを成就すると語ります。

a) この世の裁き (31節)

終わりの時に最後の審判がくだされますが、イエスの降誕から裁きが始まっていることをこの箇所は明確に示しています。

どういう意味でしょう。その答えはみことばの中にあります。今回は、ヨハネの福音書の別の箇所から答えを導き出す必要があります。

ヨハネ3 : 17-21

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。 3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。 信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。 3:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。 3:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。 3:21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

私たちは選ぶことができます。今のうちに罪を裁かれてイエスから赦しを受け取るか、罪のうちを歩みつづけるかです。後者を選ぶなら、すでに裁かれていることになり、最終的な罰を待つことになります。

b) この世の支配者の追放 (31節)

この支配者とは誰でしょう。また、この箇所は何を意味するのでしょうか。新約聖書には、サタンを指す呼び名がたくさん登場します。そのひとつが、この世の君、またはこの世の支配者です。イエスが十字架で死なれたとき、サタンが勝利したように見えたことが、実際にはサタンの負けでした。

なぜなら、誰かがイエスを信じるたびに、その人は暗闇の国から解放され、神の国という新たな国に移されるからです。

コロサイ1:13にはこうあります。

コロサイ 1:13 神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

つまり、信じる人すべてがイエスにあつて勝利を得るのです。サタンの力はイエスの十字架の御業によって打ち碎かれるからです。

(これは大きなテーマで別の機会にお話したいと思います。今日のところはこの真理を信じてください。)

c) イエスは、すべての人をご自身のもとに引き寄せられる。(32節)

イエスの十字架上の死は、イエスを信じる世界中のすべての人たちに道を開いてくれました。それまでは、神の選びの民であるユダヤ民族の話でしたが、今は日本人が神の家族の一員として受け入れられます。そうです。全世界のすべての人が、イエスの愛を受ける対象になったのです。神の聖霊をとおして、イエスは人々をご自身に引き寄せられます。少なくとも、福音に心を開く人たちを導いてくださいます。

イエスの地上での働きは終盤に入り、イエスは最後に群衆に訴えかけられます。

人々は、イエスが死んでも永遠に生きて、救い主でいられるということが理解できませんでした。

それでイエスは、35-36節でお答えになります。

12:35 イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。 12:36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。

イエスは最後にこのように訴え、群衆に応じるよう求められました。ここからは、イエスは身近な弟子たちに向けて働きをなされます。

4. イエスは、人々の不信仰を説明なさいます。(37-50節)

ヨハネは、ユダヤ人が信じないことは預言されていた（あらかじめ言われていた）と語ります。ですから、予想外のできごとではありません（38節）。しかし、中にはひそかに信じるユダヤ人もいました（42節）。

44-50節には、イエスが公の場で語られた最後の言葉が記されています。「イエスは大声で言われた」とあります。

これは、まだ心を入れ替えて信じようとしなない人たちに向けられた訴えです。

この部分で強調されているのは、ユダヤ人の不信仰が裁きに通じるということです。

イエスは、その言葉をご自身の言葉ではなく、全能の神の言葉だとおっしゃいました。

適用

メッセージの中で、私たちに当てはまる内容についていくつか触れましたが、とくに重要な点がふたつあります。

まず、イエスに仕えるために、またはイエスに仕えるよう召された人を支えるために惜しみなく献金することを恐れてはいけません。私たちが礼拝をささげている教会でおもにささげるようにと聖書は教えます。マリヤはイエスに注ぐ香油に300万円を費やしました。マリヤは、イエスの埋葬の準備という意識はありませんでしたが、イエスを愛していたのでそうしました。

イエスの働きに気前よく、または犠牲的にささげることで、人に批判されることもあるかもしれませんが、しかし、聖霊に促されてささげるなら、全能の神は必ずほほえんでくださいます。神に栄光をもたらすものを神は認めてくださいます。

昔、16歳のある少年が家を出ました。父親が貧しくて子どもを食べさせて行けなくなったからです。それで少年は荷物をまとめて、ニューヨークで石鹼製造の仕事を始めようと決心しました。

田舎者の少年は大都会に到着しましたが、職を得るのはたいへんだということを知りました。彼は母の遺言と運河船の船長のアドバイスを思い出し、人生を神におささげしました。そして、稼いだお金の十分の一はきちんと創造主にお返ししようと心に決めました。

初めて一ドルを稼いだとき、彼は10セントを聖なるものとして主におささげしました。これを続けると、彼のもとにお金が舞い込んでくるようになりました。まもなく若者は、石鹼会社の共同経営者となり、後に共同経営者が亡くなって経営者になりました。

実業家として成功した彼は、主のための銀行口座を開いて、収入の十分の一をそこに入金するよう経理担当者に命じました。この会社は奇跡のように急成長しました。誠実な経営者である彼は、今度は十分の二をささげることにしました。そして、十分の三、十分の四、ついには十分の五をささげるようになりました。まるで、彼が惜しみなくささげるのに比例して売り上げが上がっていくようでした。彼が作る石鹼のブランド名は、世界中で知られるようになりました。

創造主に忠実だったことに報いて神が富ませてくださった人は、故ウィリアム・コルゲート氏です。

「私たちはどうするでしょう。」私たちはどれくらいイエスを愛していますか。

適用2

今生きている人生、そして天での永遠のいのちにおいて祝福されたいのちを受けるには、イエスのためにいのちを失うことです。

まだクリスチャンではなくて、イエスについていく決心をするよう神に呼ばれているように感じますか。イエスについていく犠牲がどのようなものか考えなくてはなりません。それは、古い生き方を捨てること、そして、新しい人生でイエスに従おうとすることです。

イエスが十字架上でしてくださったことの重大さと、イエスを信じる人たちを待ち受ける素晴らしい恵みを理解したなら、古い生き方を捨てることは問題ではなくなるでしょう。

イエスはご自身の命を私たちにささげてくださいました。それは、私たちが天国でイエスと永遠にとともにすごせる「新しいいのち」を得るためです。新しいいのちとは、死や病気、罪から解放されたいのちです。気づいて悔い改め、イエスを心に受け入れるすべての人に対して、イエスはこのいのちを恵みによって無償で与えてくださいます。

「きょう、もし御声を聞くなれば、…心をかたくなにはならない。」（ヘブル3:7）